

灯台下暗し！CATV自社インフラの新たな活用

概要

- ① お客様宅の自社提供のインターネット回線を利用させてもらい、複数力所から生中継を実施。自社インフラの新たな活用法を見出した。
- ② 海外からインターネット回線を経由し社内編集機にアクセスし映像を伝送、速報でニュースにて放送した。



灯台下暗し！CATV自社インフラの新たな活用 ～自社インフラを活用した生中継～

地元の祭り

地元祭りの一つである“鳥羽の火祭り”では、祭りの一つに神社から約1km離れた海で禊ぎが行われる。過去の生中継では“禊ぎ”は中継回線の都合で生中継は出来ていなかったが、神社から海岸までのルート上でキャッチネットワークの光インターネット（FTTH）を契約して頂いているお客様へ説明し、インターネット回線を利用した、“禊ぎ”生中継を実施。

インターネットを利用した中継

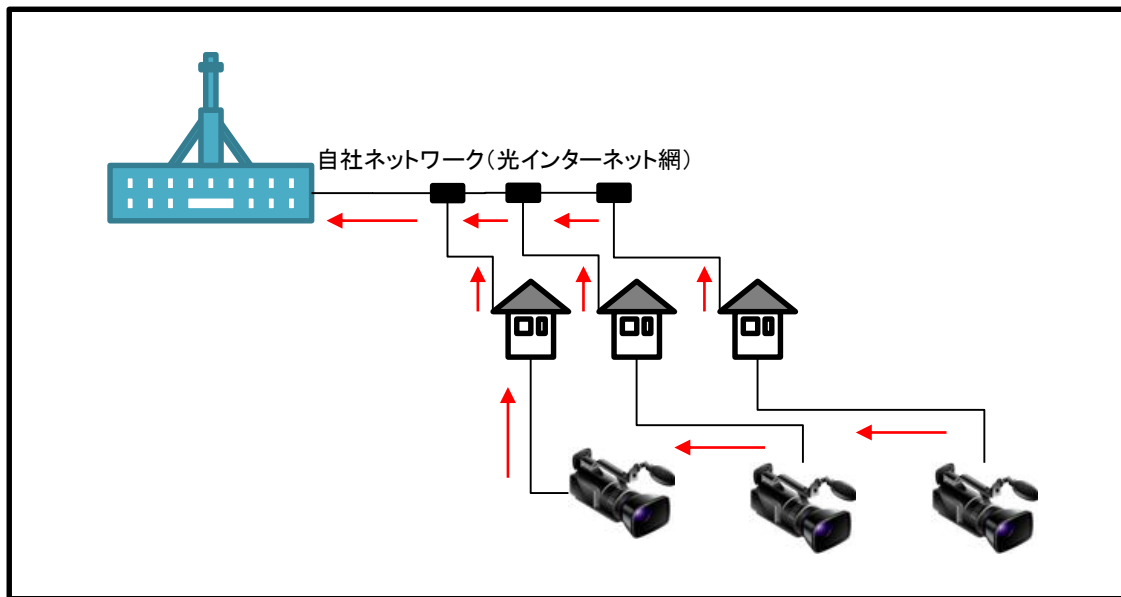
各中継ポイントのカメラ映像をIP（データ）へ変換。光インターネットモデムに繋げ、本社スイッチャーへ伝送。各中継ポイントから上がった映像/音声を選択し放送。

地域住民の理解

日々の取材や長年継続している祭り生中継が信頼関係を築き、地域住民宅の光インターネット回線を借りることに快諾。

簡単に扱える工夫

IP_Encoder（映像→IP変換機）というだけで難しいと思う人もいるが、誰でも使えるように設定は不要でLANケーブルをモデム（ルータ）につなげて、カメラケーブル（同軸）をつなげるだけで本社へ転送するようになっている。その為、不慣れなスタッフでも1人でオペレーションでき、災害時などで活用できることを目標に構成している。



カメラ

IP_Encoder
(映像→IP変換機)

LANケーブルを
モデムに繋げるだけ

灯台下暗し！CATV自社インフラの新たな活用 ～インターネットを活用した映像伝送～

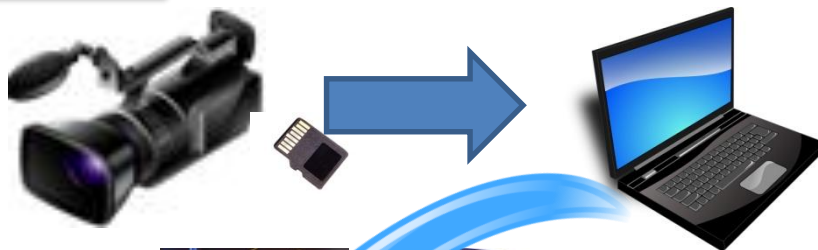
ブラジルからの映像伝送

地元企業が技能オリンピックに出場。
追っかけ取材を行った際に、現地から映像を転送し、結果をNEWSで伝えた。

映像伝送の仕組み

社内ネットワークはテレワーク（遠隔地業務）が出来るよう、インターネット環境があれば、社内のネットワークに入ることができる。
その仕組みを利用し、持出PCと編集サーバーをつなげ、遠隔地で編集した映像データを編集サーバーへ転送し、速報として放送。

ブラジル



社内NW



編集サーバー

KATCH



日本-愛知県

灯台下暗し！CATV自社インフラの新たな活用

成果

① ～自社インフラを活用した生中継～

禊ぎ中継全体では、専用線と短距離無線伝送装置、FTTH回線を活用し5拠点7CAM中継が実現し、祭りの“今”を伝える良いコンテンツが出来、地域住民へ貢献。

② ～インターネットを活用した映像伝送～

ケーブルテレビでも、自局エリアに限らず遠隔地から映像を伝えることに成功。特に今回は地球の裏側から“映像”による現地の状況を放送することができた。

課題

① 有料サービスとしてお客様へ提供しているインターネット回線を放送で使用するものの是非を議論し、ルール策定する必要がある。

② 海外ではインターネット環境が不安定且つ、低速の地域もあるため低レート映像での実験が必要。

期待される効果

事前にお客様と協定を結んでおくことにより災害時の中継ポイントとして活用することができる。

この方式で実施することで生中継回線準備時間を1/4に削減、費用負担1/5～無料となる。インターネットサービスの加入拡大により中継ポイントも増える。